



女性研究者 ロールモデル集

ROLE MODEL

静岡大学 男女共同参画推進室

P r e f a c e

国立大学法人静岡大学
男女共同参画推進室長
中 野 美恵子

女性研究者は研究を続けるうえで、自身を取り巻くライフイベントの中でさまざまな問題に直面しがちです。この問題を乗り越えるには先輩女性研究者の体験談や助言は、将来を考える良き参考となり、元気や勇気を与えてくれます。

静岡大学では、女性研究者のロールモデル集として、平成23年3月に初めて「静岡大学理系女性研究者たち ―ロールモデル集」を発刊し、女性研究者や女子学生に配付するとともに、男女共同参画推進室のホームページにも掲載しました。このロールモデル集を発刊して3年半の月日が流れ、研究者の皆様の研究環境や生活環境も変化してきているものと思われれます。

女子学生や若手女性研究者へ身近な手本となるよう、静岡大学の理系だけでなく文系の先輩も、そして、女性研究者研究活動支援事業（拠点型）における連携機関（以下「連携機関」という。）で活躍しておられる女性研究者の皆様からコメントをいただき、ロールモデル集を発刊しました。

今回発刊したロールモデル集では、若手女性研究者等が、「将来の自分の姿」をイメージする時の参考となるよう、さまざま分野で活躍中の先輩女性研究者の助言やメッセージをまとめており、研究者を目指す女性にとって、将来のキャリアを考えるうえで貴重な材料になることを期待します。

女性研究者に対する理解を深めていただき、女性研究者の活躍を推進するため、連携機関を含め、多くの研究者の方にご覧いただきたいと思います。女性研究者を志そう、自分も先輩のように頑張ってみよう、将来設計の参考にしようと考えておられる多くの方の心に届けば幸いです。

I N D E X

化学工って、おもしろい

岡島いづみ（静岡大学大学院工学研究科化学バイオ工学専攻兼グリーン科学技術研究所 助教）…… 1

憧れの動物博士に（まだまだこれから）

岡田 令子（静岡大学大学院理学研究科生物科学専攻 講師）…………… 2

感謝の気持ちと真摯な姿勢を忘れずに、自分の夢へ向かって突き進んでください

加藤 知香（静岡大学大学院理学研究科化学専攻 准教授）…………… 3

分子生物学が出発点

木村 洋子（静岡大学大学院農学研究科 教授）…………… 4

理系だからこそできる、面白い発見や発明がきっとある。

木寄 暁子（静岡大学大学院理学研究科生物科学専攻 准教授）…………… 5

ニッチこそおもしろい

小松かおり（静岡大学人文社会科学部社会科学文化人類学コース 教授）…………… 6

家族のチームワークで乗り切りたい！

鮫島 玲子（静岡大学大学院農学研究科 准教授）…………… 7

逆風満帆でも前に進もう

澤渡 千枝（静岡大学教育学部 教授）…………… 8

ワーク・ライフ・ミックス！

白井 千晶（静岡大学人文社会科学部 准教授）…………… 9

「私」でなければできないことを

杉崎 哲子（静岡大学教育学部 准教授）…………… 10

なにごとともあきらめないで！

関根 理香（静岡大学大学院理学研究科化学専攻 准教授）…………… 11

グウタラ上等

宗林 留美（静岡大学大学院理学研究科地球科学専攻（グリーン科学技術研究所グリーンバイオ研究部門サブコア） 准教授）…… 12

大学教員になってみて思うこと

田中 柊子（静岡大学情報学部情報社会学科 講師）…………… 13

感謝の気持ちをもって

田宮 縁（静岡大学教育学部 准教授）..... 14

乗り越えられない試練は無い！

中野美恵子（静岡大学教育学部保健体育講座 教授）..... 15

“WANT TO BE”を原動力に！

平田 久笑（静岡大学大学院農学研究科 准教授）..... 16

好きなことを仕事にできる幸せ

冬木 春子（静岡大学教育学部 教授）..... 17

理系女子の皆様へ

古橋 裕子（静岡大学保健センター静岡支援室 教授）..... 18

続ける勇気と捨てる覚悟

本橋 令子（静岡大学大学院農学研究科 教授）..... 19

女性研究者という生き方を自分らしくデザイン

糸川 紅子（静岡県立大学看護学部 講師）..... 20

人間として成長し続けることができる仕事それが私には研究者でした

影山智津子（静岡県農林技術研究所植物保護科長）..... 21

人生のリスタートはいつからでも！

數村 公子（浜松ホトニクス㈱中央研究所 専任部員）..... 22

なりたい自分を描いて、なりたい自分になりましょう！

金子 雪子（静岡県立大学薬学部 助教）..... 23

家族は生きる喜び、そして原動力

谷口ジョイ（静岡英和学院大学人間社会学部 講師）..... 24

意志のあるところに道はある

松永 理恵（静岡理工科大学総合情報学部 専任講師）..... 25

化学工学って、おもしろい

岡島いつみ (静岡大学大学院工学研究科化学バイオ工学専攻兼グリーン科学技術研究所 助教)

室蘭清水丘高校卒業→室蘭工業大学工学部応用化学科卒業→民間会社1に就職→物質工学工業技術研究所特別技術補助職員→民間会社2に就職(この期間に社会人ドクターとして静岡大学大学院理工学研究科に入学し、無事修了、博士(工学)取得)→静岡大学イノベーション共同研究センター研究員→静岡大学工学部物質工学科助手→同助教→静岡大学大学院工学研究科化学バイオ工学専攻兼グリーン科学技術研究所助教→現在に至る



●仕事の内容とやりがい

亜臨界・超臨界流体といった高圧流体利用技術に関する研究を行っています。具体的には、亜臨界・超臨界水やアルコールを溶媒としたプラスチックリサイクルやバイオマスの利活用、超臨界二酸化炭素を有機溶媒の代わりに用いたプラスチックの合成や有用成分抽出等です。主に水や二酸化炭素を溶媒として使用することで、環境低負荷なものづくり技術や新しいリサイクル技術の開発にどこまで貢献できるか、に挑戦しています。現在は化学工学を専門としていますので、単にできるかというだけではなく、競合技術に比べて生成物の収率は？プロセスの稼働に必要なエネルギーは？省エネルギー化できる？等、実験結果の化学的な考察に加えて、その結果を基にプロセス設計を考えることがおもしろいです。化学工学は高校では馴染みのない分野で、大学時代も授業だけだとピンときませんでしたが、実際携わってみると、幅広く興味深い分野でした。

●進路選択のきっかけ

高校2年生の半ばぐらいまでは文系志望でした。それが何故か急にいろいろな化学実験を試してみたくなり、「化学系の学科に行けば、いろいろな化学実験ができるよね」「学科としてあるのだから、4年間の勉強が必要なくらい世の中にはいろいろな化学があるんだよね」という単純思考から、理系への転向を考えました。この時、地元に応用化学科がある工業大学があったことと、そこに触媒に関する研究を行っている研究室があり、興味を持ったことが、最終的に理系に進む決心につながりました。卒業研究は触媒を用いたプラスチックリサイクルに関する研究でしたので、当初の希望を叶えることができました。最初は企業に就職したため、自分が大学教員になるとは思いもしませんでした。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

現在、2歳の息子がいます。育児をしながらの仕事は時間制約があり、平日の日中は授業関連やミーティング、書類作成等のデスクワークでほぼ終わってしまうため、自分で手を動かして実験をする時間は減りました。もともと要領が悪いので余計にそうなるのかもしれませんが、「どのくらいが良いバランスか」というのは正直わかりませんので、その時々ですべきこと、できることをするくらいの感覚で何とかやっています。夫も大学教員で育児と仕事を両立して頑張っています。夫の方が仕事は忙しいでしょうか。そこは(ちょっと)尊敬してしまいます。

●後輩へのメッセージ

やりたいことや興味があるものに巡り合えたら、まずはやれるところまでやってみましょう。何かのセリフでありました、「意志あるところに道は開ける」。もし頑張った結果が自分の希望に辿りつかなかったとしても、その過程で得たもの、出会った人を通していろいろなところにつながっていきます。色々なことにチャレンジして、たくさんのことを吸収して、自分の可能性をどんどん広げていってください。

憧れの動物博士に（まだまだこれから）

岡田 令子（静岡大学大学院理学研究科生物科学専攻 講師）

早稲田大学教育学部理学科生物学専修→早稲田大学大学院理工学研究科修士課程物理学及応用物理学専攻→早稲田大学大学院理工学研究科博士課程生命理工学専攻、博士（理学）→早稲田大学教育学部助手→日本学術振興会特別研究員（埼玉大学理工学研究科）→福井大学医学部分子生体情報学講座特命助教→静岡大学創造科学技術大学院助教→現職



●仕事の内容とやりがい

動物の生活環境と生体調節機構との関係について、特に神経・内分泌系による調節に着目して研究を行っています。主な研究対象は両生類です。哺乳類に関する研究が最も進んでいる分野ですが、哺乳類で知られる調節機構が必ずしも他の脊椎動物にそのまま当てはまる訳ではありません。脊椎動物が多様な環境に適応し、どのように進化してきたかを解明するためには、哺乳類だけでなく様々な脊椎動物における生体調節機構を調べ、その共通性と差異を明らかにしていく必要があります。また、生命現象の面白さとそれを解明していく喜びを、実習や研究指導などを通じて学生の皆さんに伝えられたらと思っています。

●進路選択のきっかけ

大学に入る際には特にどのような職に就くかなどは意識せず、子供の頃から興味を持っていた生物学をより深く学びたいという思いで進学先を選びました。学部4年の卒業研究で研究室に配属され、指導してくださった先生のお陰で研究の楽しさと魅力を知ってしまいました。それがきっかけとなり、ずっと研究をして生きていけたら幸せだと思うようになりました。採用人数の問題もあり、簡単な道ではありませんが、周りの多くの方々のおかげと幸運に恵まれ研究を仕事にすることができました。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

仕事の延長が日常生活に入り込んでくることが多く、生活と仕事を明確に切り離すことは難しい状況です。ワーク・ライフ・バランスを工夫せねばと思いつつ、なかなかうまく行きません。自分なりに仕事とプライベートのバランスをとり、心身ともに健康に生活できるのが理想ですが、まだまだ今後の課題となっています。

●先輩へのメッセージ

学生の間に色々な経験をたくさん積んでおきましょう。若いうちにしかできないことも多々あります。できるだけ色々なところに行き、色々な人に会い話を聞きましょう。学生時代には勉強も遊びも頑張っておくのがお勧めです。そういった経験を通じて自分の夢や希望、好きなこと、楽しいこと、喜びを感じることで、あきらめられないことなどを発見できると思います。比較的時間が自由になる学生時代に、自分の人生を幸せに過ごす方法を自分自身で考えておく、または考える力を身につけておいてください。また、悩むことも多い時期だと思いますが、一人で抱え込まず、友人や家族、先輩など周りの人に相談に乗ってもらったり話を聞いてもらったりするのがいいと思います。

感謝の気持ちと真摯な姿勢を忘れずに、 自分の夢に向かって突き進んでください

加藤 知香 (静岡大学大学院理学研究科化学専攻 准教授)

東京大学大学院工学系研究科応用化学専攻博士後期課程を修了し、博士(工学)の学位を取得後、カリフォルニア大学パークレー校へ博士研究員として2年間留学しました。帰国後、神奈川大学理学部で助手として5年間勤務し、その間に息子を出産しました。息子が0歳のときに静岡大学へ准教授として異動し、現在に至ります。



● 仕事の内容とやりがい

私はポリオキソメタレートという無機化合物の合成とその触媒機能に関する研究をしています。新しい化合物を作り出す楽しさ、得られた化合物の活性・機能を発見したときの驚き、そういった瞬間に立ち会う度に研究者であることに喜びを感じます。また、自分の研究室を立ち上げてからは、研究を進める過程で遭遇する困難を自らの力で克服し、大きく成長していく学生達の姿を見せてもらう度に、大きな幸せを感じています。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

家庭は、主人と息子の3人家族です。息子は小学生になりましたので、以前ほど手がかからなくなりましたが、それでも育児をしながらの研究生活は大変です。育児により仕事に集中できる時間はかなり制限されますし、子供の急な発病等で仕事を中断せざるを得ない状況になることもありますので、仕事はできるだけ効率良く、かつ締め切りがあるような仕事は早めに片付けておくようにしています。また、家族や公共のサポートを受けられるように事前に相談しておくことも重要です。育児と仕事の両立は想像以上に大変ですが、それでも仕事と家庭のある生活は、多くの感動と喜びを私に与えてくれます。

● 進路選択のきっかけ

卒業研究・大学院研究のテーマが「ポリオキソメタレートの合成とその触媒機能に関する研究」で、その当時、合成は非常に困難とされていた化合物を作り出すことに成功したときの喜びや、分子構造の変化がダイレクトに物性や機能へ反映される面白さにすっかり魅了されて、そのまま研究者になる道を選びました。

● 後輩へのメッセージ

皆さんが置かれている立場や状況はそれぞれに違うので無責任なこととは言えませんが、「こうなりたい」、「こうしたい」という夢や目標があるならば、あきらめないでそれに向かって突き進んでほしいと思います。また、夢や目標は一つだけを選ぶのではなく、貪欲にあれこれと望んで良いと思います。周りの人達への感謝の気持ちと物事に対する真摯な姿勢を忘れなければ、きっと想いは達成できると思います。

分子生物学が出発点

木村 洋子 (静岡大学大学院農学研究所 教授)

1987年、国際基督教大学教養学部卒業。大阪大学大学院卒 (理学博士)、その後米国シカゴ大学ポストドクトラルフェロー。1997年より2014年3月まで (公財) 東京都医学総合研究所・研究員 (2011年より主任研究員)。2005年より2006年までマサチューセッツ工科大学・客員研究員。2014年4月より静岡大学。



● 仕事の内容とやりがい

「タンパク質の品質管理とストレス応答」と言うキーワードで、出芽酵母を用いた遺伝学的、生化学的、分子生物学的研究を行っています。

たまに経験する新しい事を見つけたときのドキドキ感が、仕事の励みです。また静大で研究室を主宰する機会を得たので、学生さんと共に研究できることに期待しています。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

夫と、二人の子ども (高一、小6) と暮らしています。自宅が遠いので、ウィークデイは夫が家事をすることが多いです。その代り、休日は私が家事をしています。子育ては、自分ばかりできないことがわかっていたので、始めから周囲の人々に協力・ヘルプを頼み、また保育園などの公共のサービスを最大限に活用してやってきています。

● 進路選択のきっかけ

もともと理系でしたが、高校の時は、生物学は現象を並べてただ覚える学問のように感じられ (今はそうは全く思っていないが)、あまり好きではありませんでした。大学4年時に、基本的な生命現象を分子の働きで明らかにする分子生物学を知り、強い興味を覚えて大学院に進学しました。

● 後輩へのメッセージ

30歳までに結婚した方がいい (?)、家事は女性がするもの、などという妙な社会の言い伝え、慣習のようなものに縛られて、進路の選択をしないで欲しいです。周りの人のアドバイスを受けながら、自分がやりたいことは何か、できる事は何かを考えて、自分で自分の人生を選択してください。

理系だからこそできる、 面白い発見や発明がきっとある。

木寄 暁子（静岡大学大学院理学研究科生物科学専攻 准教授）

1994年 博士（農学）取得（京都大学）	2000年
1994年 日本チバガイギー国際科学研究所	米国カリフォルニア州立大学パークレー校研究員
1997年 名古屋大学大学院生命農学研究科研究員	2004年 カナダグエルフ大学研究員
	2004年 静岡大学准教授 現在に至る



● 仕事の内容とやりがい

植物の形づくりや代謝調節のしくみを、遺伝子レベルで解明する研究をしています。今まで誰も知らなかったことを、世界に先駆けて発見できることが、研究をしていて楽しいことだと思います。また、自分がしている研究が、将来環境問題や食糧・エネルギー問題の解決に役立つことがあるかもしれない、という点もやりがいがある仕事と思っています。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

あまり意識をしてはいません。研究は、「仕事だから」というふうには割り切れるものでもないように思いますし、おもしろいからやっている仕事でもあるので。

● 進路選択のきっかけ

小学生の時に理科が好きだったので、理系に進もうと思っていました。なかでも生物に最も興味があったのですが、医薬、農で迷いました。中高生のころ、丁度バイオブームがあり、これから農学系が面白くなりそうだ、と思い、植物の研究に進みました。

● 後輩へのメッセージ

面白そうだと思ったら、その思いを大切に研究なり仕事なり続けていってほしいと思います。仕事となると楽しいことばかりではありませんが、頑張っていると、他の仕事ではなかなかであろう面白い発見や発明がきっとあると思います。

ニッチこそおもしろい

小松かおり (静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース 教授)

北海道立旭川東高校卒業→北海道大学文|入学・文学部行動科学科卒業→京都大学大学院理学研究科修士課程・博士課程修了→日本学術振興会特別研究員→34歳で初めての就職が静岡大学人文社会科学部准教授



●仕事の内容とやりがい

大学教員の仕事は、研究・教育・行政の3本立てです。行政とは、学部や全学の委員会やコース内の教務や財務の仕事などです。年代にもよりますが、今は、学期中の平日はほとんど教育と行政、週末や長期休みは研究に70%を費やしています。専門は生態人類学で、アフリカを中心に、人間と自然の関係、自然を媒介した社会関係を調査しています。熱帯林の農業、バナナ、市場、といったいくつかのキーワードをもち、そこから研究を拓げます。

研究は楽しいです。自分が観察の中で気づいた疑問をとことん追いかけるからです。フィールドワークはとてもエネルギーを要しますが、達成感も高いです。教育は、研究の中で見つけたものを学生と共有する場ですし、自分が考えていることが人に通じるか試す場でもあります。社会科学の場合、知識というよりは考え方を教えることが重要なので、素材は自由に選べます。教えることで学びの領域がとても拓がりました。

●進路選択のきっかけ

中学時代、大学で文化人類学を学ぶ主人公にしたドラマをみて原作を読み、とても楽しそうな大学生活だったので、それが学べそうな北大へ進学しました。わけがわからない学問なのに、教員や先輩がやたら楽しそうなので、そのおもしろさをわからないのは悔しいと大学院へ進学して学び続けるうちに、ここまで来ました。小さい頃読んだ絵本に世界を巡る女の子の話があり、広い世界にあこがれたのはあれが最初だったなあ、と最近思います。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

教育と行政は仕事とっていますが、研究は仕事とプライベートの境界領域です。今が、行政の仕事が忙しいので学期中はほとんど研究ができませんが、月に1度程度研究会で県外へ出かけ、2年に1度程度、夏休みをほとんど使ってアフリカへ、毎年春休みには沖縄に調査に行きます。正月とアフリカに行かない夏休みは有給休暇を取って北海道の実家に長めに滞在します。このようなおでかけが生活のアクセントになっています。

●後輩へのメッセージ

研究者の社会は、どこにもローカルルールがあって、特殊です。大学院で研究を始める頃は、研究室になじみたいと思うし、周囲に認められたいと思います。そのため、ついつい、先生や先輩と似たテーマや方法を選んでしまいます。次は、学会で評価を求める、ということをやっていくと、ついついその分野の中で「本流」を目指してしまいます。

でも、研究においては、人とは少し違った視点を持つことが大切です。そのためには、自分が「はぐれもの」であることを怖れないください。それは時には、既存の研究分野を越えたりまたがったりするものかもしれません。自分の研究をおもしろいと言ってくれる仲間を外の世界で探すといいでしょ。ニッチ(隙間)こそおもしろい。女性だということも、男性が多い研究者社会ではニッチ探しに強みにもなります。反対に、女性であることに囚われないという選択肢もあります。

家族のチームワークで乗り切りたい！



鮫島 玲子 (静岡大学大学院農学研究所 准教授)

土佐高等学校→九州大学農学部→九州大学大学院農学研究所修士課程→東北大学大学院農学研究所博士課程→日本学術振興会特別研究員 (PD) →静岡大学農学部助手→長男出産、育児休暇 (半年)、夫の育児休暇 (半年) →助教→准教授→長女出産、産休→職場復帰、現在に至る

●仕事の内容とやりがい

さまざまな環境に応答して生きている微生物の中には、動植物には不可能な特殊な代謝を行うものがあります。土壌微生物が担っている窒素の物質循環のはたらき (硝化・脱窒・窒素固定) も、特殊な代謝によるたくましい生存戦略によるものです。私は、茶園や大豆畑のような、農業活動によって窒素が多く存在する土壌において、窒素循環に関与している微生物の種類やはたらきについて研究しています。また、得られた知見をもとに、農業現場で窒素循環に関連して発生する環境問題の解決策を考えています。

教育に関しては、以前は学生達と同じ目線で共に学び自分も育っていく姿勢でしたが、最近は研究・講義を通じた人材育成にもやりがいを感じるようになって来ました。子育てを経験し、他者の「育ち」を客観的に見る目が少しは備わってきたのかもしれない。

●進路選択のきっかけ

農学部教員だった父、そして高知という恵まれた環境で農業を実践的に学ばせてくれた小学校5、6年生の担任の先生の影響で、子供のころから農業問題や地球環境問題に関心がありました。また、アニメ「風の谷のナウシカ」の影響も大きかったと思います。農学部を選んだのは、地球規模から地域レベルまでの環境問題を、様々な角度から農業を通して学び、解決法を考えていけると思ったからです。気づけば、風の谷のナウシカに出てくる「腐海」のような、環境を浄化する土壌微生物の世界にどっぷりはまりこんでいました。生涯研究者を続けるつもりで博士号を取得しましたが、大学教員を目指していたわけではありません。教員としての自覚は最近ようやく少し出てきたところです。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

小学生と保育園児の二人の子供がいます。はじめは別居結婚で、平日母子家庭のため孤軍奮闘だった子育ても、有難いことに夫や私の両親が静岡へ移住してからは、チームワークとなりました。おかげで仕事のウェイトを増やすことができるようになりました。両親には緊急事態にも対応してもらい、息子は精神的に安定してきました。ただ、小学生ともなると習い事など時間を取られるサポートも必要になっ

てきました。息子はスポーツをしていますが、もっとサポートして充分に打ち込ませてやればな、と思うことがあります。ワーク・ライフ・バランスを子供たちも含めた家族のチームワークで乗り切ろうとしています。最近、大学では運営のような仕事も増え、ちょっと油断するとバランスが仕事に偏ってしまいそうなので気をつけなければなりません。特に、健康管理は仕事の一環だと思ってやる必要があります。

●後輩へのメッセージ

仕事も家庭も忙しくなってくると、限られた時間で判断を迫られることが多くなります。そのため、学生のうちに得た情報や技術を基本として、それを発展させる形で仕事をしていくことになります。必要になってから、新しいことを基礎から勉強しようと思っても、なかなか集中できる時間はとれません。自由にできる時間があるうちに、できるだけ基礎力 (資本) を培っておくことをお勧めします。どんな分野に進んでも、その道の知識や技術をしっかり吸収しておけば、それを活かせる場所が必ずあるはずです。また、人とのお会いも資本になります。できるだけ、将来につながるいい出会いができるよう、アンテナを高くして過ごしてもらえたらと思います。

●家族等協力者の声

我が家の10年間の“ワークライフバランス”は、大きく揺らぐやじろべいのように、“ワーク”に偏ったり、逆に“ライフ”に大きく偏ったりしながら、どうにかこうにか“バランス”を保っています。やじろべいの振幅も周期も一定ではありません。その間、同居のための私 (夫) の転職 (妻と同業) がうまくいったり、妻の両親が近所に引っ越してきてくれたりで、やじろべいの安定感が増しつつあるように思います。子供たちは、ちょっと変わっているけどそれなりに安定した家庭 (やじろべい) を基地にして、保育園や小学校、習い事、その他の地域活動を通じて、たくましく育っていると思います。家族が健康に過ごし、子供たちも成長することで、家庭の安定感が増していくことを期待しています。

逆風満帆でも前に進もう

澤渡 千枝 (静岡大学教育学部 教授)

高校卒業→1976年：武庫川女子大学家政学部→1980年：奈良女子大学家政学研究所（修士課程）
→1982年：武庫川女子大学家政学部助手→1984年：奈良女子大学人間文化研究所（博士課程）
→1987年：静岡大学教育学部講師→（在職中1年間McGill大学博士研究員）→2007年～：現職
学術博士（1987）、工学博士（1990）



●仕事の内容とやりがい

「教育と研究」というのが教授の本来の仕事ですが、「大学・学部・学科の運営」という、人によっては「雑用」と呼んでいる仕事が多いのほかに多いです。どの大学も似たりよったりかもしれませんが、特にここは、教授ひとりですべての事務員の仕事までこなします。授業・会議・研究の時間配分が難しいのが悩みの種です。特に教授に昇任してからは会議の時間が激増しました。

研究内容は、被服—繊維—高分子と、マクロからナノの世界を往来して、高分子の構造と性質を調べたり、改良したりしています。実験方法を工夫したり、新しい現象が見つかったり、疑問を解明していく過程が面白いのです。また、研究を通して、研究室の学生さんたちが成長していく姿を見るのが楽しみです。

●進路選択のきっかけ

平凡な専業主婦にはなりたくない、というのが子どもの頃からの漠然とした思いでした。推理小説を読むのが好きで、絵を描くのが好きな自称文系でしたが、高校生のとき、進路説明会で、「文学部へ進学してもほとんどは事務員」「HEIB（home economists in business）は米国の企業では重要な役割を担っている」という説明を受けて家政学部を選択。理論だけでなく実験実習科目が豊富で、高校までの授業とは打って変わってのおもしろさでした。卒論の研究室は「繊維化学研究室」に入り、研究が好きなら大学院に進学しては？という先生の勧めで、修士へ。修士終了後に就職してみても、「学生」という恵まれた環境（＝研究三昧の生活）を求めてさらに博士課程へ……と、結構行き当たりばったりです。いろいろありましたが、それらのお陰で現在の私がある、と思っています。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

残念ながらこれは徒勞に終わっています。愚痴のようにはしか見えませんが、十人十色のケースがあること、上手くやっている人ばかりではないこと、正解は無いことなどを伝えるのもまた必要、という気持ちで書きます。天涯孤獨で生きているのではない限り、人生は自分の予定通りには進められません。単身時代は出張大好き人間でしたが、この15年間、海外出張はあきらめ、北海道や九州でもほぼ日帰り出張です。東京や

京都の学会でも連日日帰りだと疲労が溜まります。それでもこれまで、振り返るといつも睡眠時間を削ることで対処してきました。しかしこれも50歳を超えると年々きつくなってきて、更年期の不調と相まって徹夜明けの1日は頭も冴えません。しかも仕事（研究以外の）は増える一方で奇立ちは募るばかりです。体力で乗り切れるのは若いうち、今は態勢立て直しが必要な時期を迎え、悪戦苦闘の毎日です。

●後輩へのメッセージ

大学を卒業したのはもう30年以上も前のことですから、時代も変わってきました。今では女性が活躍できる場がどんどん増えていますし、企業でも男女共同参画が進んでいます。

しかし、人々の意識が変わるのはゆっくりです。家庭を持って、仕事も続け、充実した人生を送るための最重要項目はパートナー選びです。手取り早くは、ジェンダーに囚われないパートナーを見つけること。そうでなければ意識改革を試みること。その有無が人生のストレスにも追い風にもなります。

一度しかない人生です。自分らしく生きるための環境づくりを怠ってはいけません。全てをこなすスーパーレディを目指すのも素晴らしいですが、取捨選択も必要だと思います。「私にはこれしかありませんから。」と、きっぱりと微笑む専門家って意外に魅力的です。

●男女共同参画に思うこと

私はずっと大学にいるせいか、男女差別ということをはほとんど意識しないで過ごしてきました。また、女子大育ちのためか、「男子力」を当てにしない生活をしてきました。静大に来て、女子学生が男子力を上手く使っている（悪く言えば男女の役割分担）を見てカルチャーショックを受けました。婚姻後に男性の姓を名乗るのが当然と考える学生が多いのにもびっくり。私が世間知らずなのかもしれませんが、女性である前に人間であること、社会人であることを意識しており、少なくとも大学内では、それでやっていけます。でも大学外ではそれが通用しない社会常識が根付いています。男女共同参画を唱えなくても自然に実現できる時代が理想です。人の性格は男女差よりも個人差に因るものですから、心理面の配慮ではなく生物学的な性差についての配慮は、男女共に必要だと思います。

ワーク・ライフ・ミックス!

白井 千晶 (静岡大学人文社会科学部 准教授)

高校卒業→東京外国語大学外国語学部→早稲田大学大学院(修士課程、博士後期課程)→助手・非常勤講師など→日本学術振興会特別研究員などを経て、現職。専門はリプロダクションの社会学、出産の社会学研究を含む。3男児の母。



● 仕事の内容とやりがい

家族、リプロダクション(産む・産まない・産めないことや出産、子育て)、子どもや女性の福祉について、社会学から研究しています。

社会を知ることは、日々発見があり、また、何か社会に還元できたらと思うことが、やりがいにつながっています。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

ワークとライフはバランスを取るといふより、ワークもライフも切り離せない、ミックスしたものだと思います。食事を作りながら研究のアイデアが浮かぶ。ママ友との話が仕事に活きる。どちらもとても大切なもので、相乗効果が大きいと思います。幸せなことに私は3人の子どもの母親をさせてもらっていますが、そこで私が根底から気づかされたのは、ひとりで、あるいはパートナーと二人だけで子育てはできないということ。居合わせた人、通りすがりの人を含め、多数の方に助けていただいて、今があります。助けられるときには助け、助けてほしいときにはお願いする。ワークとライフは人生そのものだと言われました。

● 進路選択のきっかけ

大学では日本語学科で日本語教育を学びましたが、大学4年生のときに出産の歴史の本に出会い、社会学での大学院進学を決めました。「お産ワールド」には、研究から入りましたが、中から見ても外から見てもおもしろいです。

研究として女性のライフコースを追いかけているうちに、出産だけでなく、不妊、子育て、女性や子どもの福祉へと対象が広がっていきました。

● 後輩へのメッセージ

家庭も仕事も二兎を追う者は、二兎を得られるのかもしれませんが。二兎を追うことは欲張りとか、中途半端とかではなく、エネルギーの源になるのではないかと思います。

現代日本では女性が「ケア役割」に偏りがちで、育児か仕事を迫られがちな社会ですが、自分が望むならば、仕事と育児、仕事も育児も、つまり「か」ではなく「と」「も」の相乗効果で楽しく生きていけるとと思います。そして、他の人の相乗効果も助けられたらいいですね。

「私」でなければできないことを

杉崎 哲子（静岡大学教育学部 准教授）

静岡大学教育学部を卒業後、家庭の協力が得られず、また思うところがあって「専業主婦」として家事・育児に専念。十数年間は「親でなければできないこと」を実践。子供（3人）の成長に合わせ可能な範囲で非常勤講師をしながら研究を進め、大学院に進学して修士を取得する。子供が進路に際して「夢」を語るのを聞いた時、ようやく自分の「夢」を追い求められる時期の到来を実感し、中高一貫校の専任教諭となる。その後本学に赴任し4年目を迎えた。



● 仕事の内容とやりがい

教育学部の国語講座に属し、芸術文化課程書文化専攻教室を担当しています。専門は「書写・書道」で、小・中学校の「国語科書写」と高等学校の「芸術科書道」、生涯書道に関わる授業を担当しています。書文化専攻生は学年に5名と少人数ながら、入学時から専攻全体での活動が多いので、実にアットホームで、私は「静大母ちゃん」になっています。

今、自分の「夢」が叶って研究職に従事でき、学生さんの大切な時期に関わっていただけることを大変うれしく思うと同時に責任の重さも感じています。大学の教員とは、実にやりがいのある仕事だと思えます。

● 進路選択のきっかけ

小さいころから教員になるのが「夢」でしたが、県外者の採用が難しかった時期ということもあって卒業時には採用試験に合格しませんでした。翌年には合格したものの、結婚の問題や子育てに関して「先生の代わりはいるが母親の代わりはしない」との考えから、専任になることを断念しました。その後も家族の協力が得られなかったため、長く「専業主婦」をしてきました。

ようやく時間が出来て高等学校の国語の非常勤講師になった初日、教室中に響くシャープペンの打叩音に驚愕し、「書写・書道」の重要性を再認したのを契機に、学部時代に取り組んでいた「書写・書道」の研究を再開しました。

また腰を据えて子供の成長をみてきた「私」だからこそできることをしたいと考え、時期を待って教育職にも就きました。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

かつてはPTA活動や地域社会の行事に対して男性の参加は名ばかりで、結局は女性がやるという状態でしたが、その学校初の女性PTA会長になり、町P連の会長や郡の副会長も務めました。その時、全会員が無理なく楽しく参加でき、父親の出番を多くする等、幾多の改革を進めました。今では町制として周知されている「エンゼルプラン」の作成にも関わり、女性のワーク・ライフ・バランスを応援してきました。

あれから時が流れ男性陣の意識も変わってきたので女性が働きやすい社会になってきたように思います。しかし子育てという点からすると、男女ともに「親でなければできないこと」を自覚する必要はあると思います。

私自身のこれまでは、ライフが先にあり、ようやくワークという形でした。今後は「介護」の問題も発生すると思われるので、ワークとライフのバランスを再検討して、「今の私」にできることに精進したいと思っています。

● 後輩へのメッセージ

私の場合、今となっては「結果オーライ」ですが、夢を諦めかけ社会からも取り残されたような気持ちになっていた時期が何年かありました。ただ、荒廃した中学校の現状をみていたので、当時の私自身の選択は間違っていなかったと思います。二度とない大事な時期に子供に十分に関わってきた経験は、成長段階を長期的にとらえることができるという点で、また保護者との連携という点においても、今に生きています。

近年、男女共同参画が推進されて「いい時代」になってきました。とはいえ自分の生活・人生は自分自身で切り開くしかありません。それは性別、既婚未婚を問わず言えることです。特に子育てに関しては、数々の制度を利用しながらご自身を大事にして、「あなた自身」でなければできないことは何かということ、時期も含めてお考えになってください。後悔しないよう、熟考のうえで前進されるよう望んでいます。

なにごとともあきらめないで！

関根 理香（静岡大学大学院理学研究科化学専攻 准教授）

筑波大学附属高校→東京大学理学部化学科→岡山大学理学研究科（修士）→東京大学理学研究科（博士）中退→東京工業大学工業材料研究所寄附研究部門教員→理化学研究所基礎科学特別研究員→東京工業大学理学部化学科助手→現職。2002年に結婚し、2003年に出産。家族：夫、息子（小学5年）



● 仕事の内容とやりがい

静岡大学で教員として勤めて、18年が経ちました。研究分野は量子化学・理論化学で、現在は理論化学に偏っていますが、もともとは材料設計につながるような量子化学計算を多く手掛けていました。テーマに関わらず、頭とコンピューターを駆使し、そしていろいろな研究者と討論するなかで、アイデアが生まれ、それまでだれも知らなかった関連性が見えてきたときが研究の醍醐味だと思います。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

赴任当初は独身で研究と教育が主な仕事でしたが、今は教育と大学運営にかかわる仕事の比重がふえ、研究の時間が減りました。子どもが成長するのは早いので、子どもが親との関わりを求めるときにはできるだけ応えてあげたいと思い、その分仕事をセーブしています。セーブするといっても、夜間・休日に仕事をせざるを得ないときもあり、そういうときには家族と予定を調整しての綱渡りをするようになります。

● 進路選択のきっかけ

化学を専攻することは、大学2年になってから決めました。実際に大学にはいて、いろいろな学問に触れてから選ぶことができたのはよかったです。もともと物理、数学、情報（コンピューター）も好きで、どれを専攻するか迷ったのですが、気がついてみればすべてに関連する分野の研究をしているようです。化学は自然界の複雑な現象を分類・整理して体系化してきた学問ですが、根底にある数少ない原理で複雑な現象を説明することを夢みて、量子化学・理論化学の分野を選びました。

● 後輩へのメッセージ

私は結婚したのが39歳、出産が40歳でした。もとより研究を一生続けたいと思いキャリア形成をしてきましたが、一方で母親になる夢も捨てきれずにいました。配偶者には心より感謝しています。経験してわかりましたが、年をとってからの子育ては、高齢出産以上に厳しいものがあります。チャンスがあれば、若いうちに出産することをお勧めします。一方で私の友人で3人目の子どもを42歳で出産した中学教師もいます。昔に比べれば選択の幅は広がっていると思います。可能性を自分で狭めることなく、チャレンジしてください！

グウタラ上等

宗林 留美 (静岡大学大学院理学研究科地球科学専攻(グリーン科学技術研究所グリーンバイオ研究部門サブコア) 准教授)

1998~2000年	2001~2011年	静岡大学理学部助手(助教)
日本学術振興会特別研究員(DC)	2011~2013年	静岡大学理学部講師
2000年	2013年~現在	静岡大学大学院理学研究科准教授
東京大学大学院理学系研究科修了。博士(理学)取得		
2000~2001年		日本学術振興会特別研究員(PD)



●仕事の内容とやりがい

私は、海洋で生物や物質がどんな風に関わりあっているのかを知りたくて研究しています。たとえば、海水には大気中に存在する二酸化炭素の総量に匹敵するほどの大量の炭素が有機物として貯蔵されており、その中には作られてからすぐにバクテリアなどの生物に分解されるものもあれば、何千年も残り続けるものもあり、何がそのような大きな違いを有機物の分解性にもたらしているのか全くわかりません。研究では、船に乗って海水を汲み、生物の数や働きと物質の濃度を測定します。そのようにして得られた観測結果から仮説を導いて、実験でその仮説を証明できたときは、世の中で実際に起きている自然現象を説明できたような気がして、やりがいを感じます。

●進路選択のきっかけ

物心ついたときから全く理科に興味がなかったのですが、大学進学にあたって「論理的思考力を身につけたい」と思い、理学部を選びました。海洋学を選んだ理由は、当時、発展途上国で働くことに興味があり、海だったら海外とつながりを持ってそうだという安直な想像からです。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

結婚してからずっと単身赴任で、生まれつきグウタラな性分なため、自分の部屋に帰るとダラダラしてしまい、時間を流し捨てている感覚です。ロールモデル集に寄稿しておいて恐縮ですが、仕事と生活のバランスをとろうと思ったことすらありません。強いて挙げるとすれば、最近は家族の有難みを感じ、自宅や実家にできるだけ帰るようにしています。

●後輩へのメッセージ

研究者は何か一つの学問に秀でていないと務まらないと思っていましたが、自分が地球科学の分野の研究者になってみて、いろいろな知識や考え方がちょっとずつあることも大変有用だと気づきました。得意分野がなかったり、苦手分野があるせいで研究者になることに不安を感じている人、そしてワーク・ライフ・バランスについて心配な人に、知りたいという気持ちがあれば大丈夫だと伝えたいです。

大学教員になってみて思うこと

田中 柰子 (静岡大学情報学部情報社会学科 講師)

2007年9月より4年間、フランスのストラスブール大学博士課程比較文学研究科に留学。2009年より2年間、同研究科にて非常勤講師として文学の授業を担当。2010年より1年間、日本研究科にて非常勤講師として日本語・日本文化の授業を担当。2011年3月に東京大学大学院博士課程人文社会系研究科を単位取得満期退学。2011年7月に帰国。2012年4月より静岡大学情報学部情報社会学科に講師として着任。2013年5月にストラスブール大学にて論文審査を経て、比較文学の博士号を取得。



● 仕事の内容とやりがい

初修外国語としてのフランス語の授業を担当する傍ら、学部専門科目では「メディア・スタディーズ」や「情報社会思想」、個別分野科目では「ことばと表現」といった様々な授業に携わっています。学生時代から専門としてきた文学で身につけた分析方法や理論を、今では広告、ファッション、映画といったメディアに応用し、情報社会を読み解く手がかかりとしています。毎回、学生の反応を確かめながら授業を行っていますが、表情から真剣さやわくわくしている様子が伝わってくるときに充実感を覚えます。学生からおもしろい作品を紹介してもらったり、議論を通して刺激を受けたりすることも少なくありません。

研究面では文学に関するテーマを追究していますが、学生からの意見や授業の成果を反映できるような、よりポップで、アクチュアルな研究も進めています。

● 進路選択のきっかけ

大学で専門分野を決める際にいろいろと迷いましたが、小学生のときに3年間ほど過ごしたフランスとのつながりを持ちたいと思い、フランス文学を選択しました。その後、就職活動をしたり法科大学院を目指したりなどまた迷いましたが、結局自分にとって一番無理がなく適切な選択肢と思われたフランス文学の修士課程を選び、博士課程まで進みました。スイスのジュネーブ大学とフランスのストラスブール大学への留学を経て、言葉や文化を教えたり、それらについて話して考える楽しさを知り、フランス語を教える大学教員になりたいと思うようになりました。現在、フランス語だけでなく、より幅広い分野についての授業にも携わることができて、よい環境にいると思います。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

期限が迫っている委員会の業務や、授業の準備に追われて、殺伐とした毎日になりがちですが、健康で明るい気分で行っていることは授業を行う上でも大事なことだと思うので、しっかり食べて寝ることを意識的に心がけています。今はそれで何とかなっていますが、これからより責任のある仕事を担当するようになり、また近い将来、出産をし、子育てをする可能性もあることを考えると、ときどき不安になります。悩みを聞いてくれる年齢の近い同僚、支えてくれる年上の先生が近くにいるので、困ったときは頼ろうと思います。

● 後輩へのメッセージ

何をするにしても嫌な思いをしたり、困難にぶつかったりすることはありますが、過去は過去としてとりあえず前に進む「切り替えのよさ」が、研究者や教員には必要だと思います。悩み考え込むこともときには大事かもしれませんが、若いときのエネルギーやひらめきはポジティブな方向にどんどん使った方がよいと思います。毎回の仕事で「完璧さ」を求めすぎないこと、失敗したら次回改善することが今の私から、若い人へのメッセージです。

● 家族等協力者の声

「パートナーが自立し、仕事において挑戦を続けているのは、楽しいし、刺激的です。」(夫の声)

感謝の気持ちをもって

田宮 縁 (静岡大学教育学部 准教授)

静岡大学教育学部幼稚園教員養成課程卒業後、一般企業に就職。静岡大学大学院へ進学し、教育学研究科学校教育専攻修了。静岡大学教育学部附属幼稚園に勤務。常葉学園大学教育学部講師、准教授を経て現職。



● 仕事の内容とやりがい

大学教員の主な仕事は、教育・研究・社会貢献です。

教育については、熱心な学生とともに学ぶことは幸せなことです。また、自身の授業をテキストにまとめ、他大学の学生にも自分の考えを伝えることができたときにはやりがいを感じます。研究については、教育現場での課題を解決するために、他の機関との連携や多くの方の協力を得て進めています。それも仕事の醍醐味だと思います。研究成果が実践の場で少しでもお役に立つことができれば幸いです。最後に社会貢献ですが、教育現場や行政からの仕事が中心です。可能な限りお引き受けし、自分なりに真摯に取り組んでいます。現場や現場の方とかわることで、私自身、多くのことを学ばせていただいております。また、そこで得た知見が、教育や研究にもいかされています。

● 進路選択のきっかけ

大学進学は、両親の意向。その後の進路は自分で決めました。

非常に感覚的な言い方もかもしれませんが、置かれた場所で期待されている役割を果たしていると、次のステージがやってくる。その都度、新しいステージに身を委ねてきました。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

人は人生のほとんどの時間を仕事に費やします。ワークの部分が大きくなるのが当然であるとともにワークとライフが重なりあっているのではないのでしょうか。プライベートで行った旅行先でも、自宅でテレビを見ていても、常に仕事に使えるネタを探している自分に気づくことがあります。とても幸せなことだと私は思っています。

辛いこともありました。早朝からの仕事が入ったとき、保育園が開所する前に子どもを保育園の門の前に置いていたり、急な仕事が入り、子どもにひもじい思いをさせたりすることもしばしば。しかし、仕事はがんばって乗り越えなければならない時期があると思います。

子どもをはじめ、多くの人の支えで今の仕事成り立っていることにいつも感謝しています。日頃からお互いを尊重し、支え合う関係をつくっておくことが大切です。

● 後輩へのメッセージ

参考にならないかもしれませんが、私は3つのことを心がけてきました。

- 出会った人とのかわわりを大切にすること。
- 地味な仕事であっても感謝の気持ちをもちながら行うこと。
- 10年後、20年後の自分をイメージすること。

乗り越えられない試練は無い！

中野美恵子（静岡大学教育学部保健体育講座 教授）

大学卒業後2年間静岡県高等学校教員。静岡大学教養部に採用されて以来ずっと静岡大学に35年以上。所属は教養部改廃に伴って教育学部生涯スポーツ教室へ。学生時代から社会体育の仕事（講習会講師：初めはピアノ担当）をやっていたので、それが様々に広がりを構築しています。思えば4歳から必死にやっていたピアノが、今の自分の根源になっています。



●仕事の内容とやりがい

☆教育について……毎年、毎日、生涯スポーツ専攻の元気な学生と授業やゼミ活動、実験や測定などで時間を共有していることは、自分にとって勉強の毎日であるとともに、他にストレスがあっても忘れることが出来るくらい、貴重な時間と考えています。

☆研究を含めた社会的活動について……「幾つになっても健康でありたい、自分自身のこと自分でやりたい」……人間にとって切実な願いです。これを目標に「自立体力プログラム」の開発から携わって約10年、幸いにも地域を超えてプログラムは広がりをみせてきました。学生時代からボランティアで始めたラジオ体操の仕事も併せ、一人でも多くの方々が元気に毎日を送って頂ける、そのきっかけになる、やりがいのある仕事と考えています。これらを通じて得てきた人との繋がりは、様々な、複雑に現在の仕事をサポートしてくれています。

●進路選択のきっかけ

- ①教師……両親を見て、小さい頃から教師になりたいと漠然と思っていました。学生と接している親に、日常と違う姿を感じていました。
- ②薬剤師……女性として自立するためには、手に職を持つべきである（母の持論）。
- ③獣医師……動物大好き、小さい頃からのあこがれ
- ④ピアニスト……努力は重ねたけれど、決定的に手が小さくて中学1年で断念

高校3年次に悩み、更には大病を患ったため「健康と身体」の重要性を痛切に感じることに。それがあって「健康教育」の教師を目指して進学しました。

④以外は、どれも自分自身には可能性があった、と思っています。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

結婚してから私はずっと実家で親と同居し、パートナーは東京で親と同居。週末のみ家族らしい形式を続けて30年以上。初めは親戚から「2年はもたない結婚」と言われたけれど、周囲の協力と理解があって継続しています。実家の生活は、初めの頃は独身時代の延長でしたが、親の介護が始まる頃になると同居の価値が高くなり、親から頼られるように。

学生には「夕方帰る宣言」をし、買い物から食事等の世話をした後の時間を活用し、自宅で出来る仕事をやるように変更。学生たちの理解と協力もあって、けじめをつけた生活が出来たと思います。関係する周囲の人たちへ事情を話すことで、ワークとライフのバランスをある程度は図ることが出来ると思うけれど、実際に「介護」は感情が入って厳しい状態です。

●後輩へのメッセージ

臆病にならず、誰かから、何か頼られることがあれば「折角声を掛けてくれたのだから有難い」くらいの気持ちでトライした方が良いと思います。もしあなたを選んで声を掛けて下さったならば、尚更のことだと思っています。女性は様々に考えてしまい、こうしたきっかけを不安に感じたり、「自分で出来るのか」と自信を持たずに辞退することが多いですね。初めから自信をもって仕事を出来ることの方が少ないと思っていて、「乗り越えられない試練は無い」くらいに「思い込む」時必要だろう、と考えてきました。

●家族等協力者の声

私と妻とは結婚以来、約35年別居状態で、1ヶ月に2～3回は妻が東京に来る。私は月に1回静岡へ行く状態を継続し、思うように仕事をしてもらっている。妻は時には癪癪を起こすことがあるが、私はまあまあと諷魔化して、仕事（報道）が不規則で忙しいと逃げてばかり。たまにはご機嫌をとって食事をご馳走したり、旅行へ行ったりしているが。

歳を重ね、仕事をするのはあと何年か。一緒に住むのが楽しみな（恐ろしい？）毎日である。

“WANT TO BE”を原動力に！

平田 久笑 (静岡大学大学院農学研究所 准教授)

東京大学大学院新領域創成科学研究科 (博士課程) 修了後、日本学術振興会特別研究員を経て、2006年に静岡大学農学部助手として着任。同助教を経て現職に。学生時代の留学を機に親元 (東京都) を離れ、米国ミシガン州～東京都西東京市～千葉県柏市～東京都文京区と夢を追うように、そして研究室の移動と共に移り住み、「また家に戻ると思っていた……」との親の期待をよそに就職、結婚。別居→同居→別居の後に、静岡で夫婦共働き。



●仕事の内容とやりがい

植物に感染するウイルスや細菌などの微生物が、どのように病気を引き起こすのか、またそれをどのように防げるか研究しています。『植物病理学』や『植物医科学』と呼ばれる分野です。学生時代に植物ウイルスの感染により、葉や花の色が濃淡ある模様のように変化する現象を観察し、“目に見えない小さな微生物のしわざ”について調べてみたいと思いました。植物の耐病性や、微生物の病原因子について調べる過程で、現象に至るメカニズムを紐解く研究の楽しさを覚えました。植物が病気になるしくみがわかると、適切な防除や治療について考えることができます。重要作物の病気はもとより、世界的に問題視される病気や新たに発生する病気についても研究し、安定した作物生産と食料問題の解決に貢献したいです。研究活動は長距離マラソンにも例えられますが、同じような志を持ち集う研究室の学生や、学生時代から共に研究を続ける仲間存在も大きな励みです。

●進路選択のきっかけ

米国留学した際に、異国の広大な農地にも日本と同じ病気が発生しているのを目の当たりにして、植物病の防除は世界規模で取り組む課題であると視野を広げました。研究室では、多民族メンバーによる国境を超えた研究協力の楽しさを学びました。再び大学院留学する夢を抱いて帰国するも、「女性は博士号を取得しても職がない、結婚が遅れる」との一般論に戸惑い、迷いながらも日本で進学しました。案の定、女性は少数派で研究室同期の紅一点でしたが、仕事を辞めて既婚ながら単身で日本に留学していた中国人女性の「一度決心したらトコトンやる」姿勢に感化され、自分も必ず博士号を取得し研究に携わる仕事に就きたいと思うようになりました。大学教員になることは想像していませんでしたが、子供の頃には教育職を希望していたこともあり、夢への羅針盤を持ち続けていたこと、親身な助言者や悩みを分かち合い協力し合える友人に出会えたことは大事な要素でした。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

仕事と家事・育児を担う立場になり、学生の頃は気にもとめなかった「ワーク・ライフ・バランス」の重要性を感じるようになりました。特に職場の理解と支援制度は不可欠です。妊娠中の実験作業を研究支援員が、産休・育休中の講義と研究室の学生指導を代替教員がサポートくださり非常に心強かったです。更に学内の多目的保育施設で託児をお願いできるおかげで、小さな子供を抱えながら復職することができました。その時々ライフスタイルに合わせた働き方を模索することもありますが、着実に女性が働きやすい環境が構築されつつあると感じます。家事育児を分担してくれる夫と、保育園通いの子供が病気になると飛んで来てくれる実家の母にも感謝しつつ、常に仕事を楽しめるように心がけています。綱渡り的な忙しさにストレスを感じることもありますが、だからこそ“やりがいある好きな仕事”に携わることが豊かな生活を送るエッセンスになるのだと思います。

●先輩へのメッセージ

研究でも、プライベートでも、結果が出るまで「あきらめないこと」、「こうなりたいなあ (want to be)」を思い続けること、そしてロールモデルと思えるような先輩に相談し助言を求めることも大事と振り返ります。先々を案じて無難と思える選択をしても、悔いを残すことになるでしょう。これからの女性は、枠にとらわれず挑戦していく姿勢、そして就職、結婚、出産・育児などのライフイベントを乗り越えていくタフな心構えが求められます。日本では、いわゆる社会的地位を確立する女性モデルのイメージがまだ乏しいですが、国際学会などへ出向くと、外国人の女性研究者の多さと、その強さに圧倒されます。時には自分で自分の背中を押す勇気も必要でしょう。夢や理想を純粋に追い求められる学生時代にこそ、「結果は後からついてくる！」を信じて努力を惜しまないで欲しいと思います。お手伝いできることがあれば、いつでもお声かけください。

好きなことを仕事にできる幸せ

冬木 春子（静岡大学教育学部 教授）

高校卒業→奈良教育大学教育学部幼稚園教員養成課程→大阪市立大学生活科学研究所（修士課程）
→大阪市立大学生活科学研究所（博士課程）→三重短期大学生活科学科講師→三重短期大学生活科学
学科助教授→静岡大学教育学部助教授（准教授に名称変更）→静岡大学教育学部教授（現職）



●仕事の内容とやりがい

大学の教員になって約15年が経ちました。本来の研究分野は家族関係学ですが、学部時代に幼児教育を専攻していたこともあり、家族関係学と保育学の専門領域とそれをつなぐ研究や教育が自分の仕事です。研究や教育のアイデアの源泉は日々の生活にあります。日々の問いから研究テーマが生まれ、データ収集や分析を行うなかで、そこに潜む法則性を見出すという仕事が好きで、思うようにいかず悩むことも多々ありますが、やはり「好きなこと」を仕事にできるとは幸せなことだと感じています。

●進路選択のきっかけ

高校生の時から「自分は専業主婦には向いていない」と思い、「手に職をつける」ため教育学部を選択し、教師になることを目指しました。ところが、大学で交換留学制度を利用して一年間アメリカの大学で学ぶ中で、学問の「おもしろさ」に目覚めました。当時はジェンダー研究に興味をもち、「家族社会学」を学びたいと思い大学院に進学しました。大学院では、社会調査の手法について学び、自らの「問い」について調査を行い、分析していくおもしろさに触れることができました。今でもそれは私の研究スタイルとなっています。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

3歳の子どもがいるので、自宅一保育所一職場を往復する日々です。「仕事と育児の両立」は想像以上に大変で、「子ども中心」で生活が回っています。子どもが保育園にいる時間帯が私の教育・研究の時間で、休日の学会参加は以前よりも回数が減りました。一方、子どもを介していろいろな職業、年齢、境遇の人びとと知り合うことができ、静岡にも馴染めてきました。

今は、周りの先生方に助けて頂きながら仕事をしている状態です。できるだけ工夫しながら、職場に貢献していきたいと思っています。

●後輩へのメッセージ

「就職」「転職」「結婚」「出産」等……将来を思い描いてもなかなか思うようにはいかないと、自分と与えられた条件の中で「優先すべきこと」を決め、自分らしく生きる道を探ることがいいのではないかと思います。

理系女子の皆様へ

古橋 裕子 (静岡大学保健センター静岡支援室 教授)

九州大学医学部卒・東京医科歯科大学大学院卒・医学博士

九州大学医学部付属病院、九州労災病院、東京医科歯科大学付属病院、東京都中部総合精神保健福祉センター、国立精神神経センター等を経て現職に至る。

精神科専門医・精神科指導医・精神保健指定医・認定産業医の資格を取得



●仕事の内容とやりがい

主に学生・教職員への健康教育・相談・健診業務です。

また、精神科的臨床研究も同時並行で行っており、毎年国内・国際学会に最新の知見を発表するとともに論文執筆もしております。

医療、教育、研究の仕事はやりがいはありますが、相当消耗もします。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

家族とは別居なので、平日は仕事、休日は主に家事をしています。

ポーと白昼夢にふける癖もあって時間の使い方は下手であり、ワーク・ライフ・バランスの工夫をしているとは言い難い毎日です。

●進路選択のきっかけ

私が医学部生であった当時は女子の入局を嫌がる医局も多かったので、誘ってくれた精神科に誘われるまま入局し現在に至っています。

今頃になってあの時〇〇科に入局しておけば……と後悔する(!?)こともあるので進路選択はきっちり考えるべきでしょう。

●後輩へのメッセージ

理系女子である皆様は実験や実習等で大変でしょうが、健康に気をつけて充実した毎日を過ごしてください。「寝る・食べる」も大事です。

続ける勇気と捨てる覚悟

本橋 令子 (静岡大学大学院農学研究所 教授)

明治大学農学部→明治大学大学院農学研究所→東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程博士(農学)→理化学研究所ゲノム科学総合研究センター研究員→現職静岡大学農学研究所教授



●仕事の内容とやりがい

カンキツのDNAマーカーを用いた品種分類から、イネのトランスポゾンの研究、シロイヌナズナのタグラインの作製、葉緑体タンパク質の機能解明と研究内容は一貫して植物の不思議を解き明かす事です。そして、植物の機能を社会に役立てる事ができれば良いと考えています。今はプラスチド分化のメカニズムの解明に力を入れています。誰も今まで知らないような植物の機能を発見した時や君の研究は面白いねと言われたときは、疲れも吹っ飛びます。教育としては、研究者にならない学生、研究に興味がない学生に、研究生生活を通して社会性やチームワーク、物事に真摯に向き合う事などを教えるのがある意味「お仕事」なのかもしれません。雑用に流され、研究論文の執筆が進まない、学生への指導時間が作れないなど、問題は山積みですが、無事卒業していく学生の笑顔を見るとホッとします。

●進路選択のきっかけ

子供の頃から生物が好きで、牧野富太郎植物図鑑を眺めるのが好きでした。誕生日プレゼントに顕微鏡を親にねだり、庭の植物の茎から母親がきざんでいるセロリや大根の茎まで、切片を顕微鏡で観察し、ノートに維管束の絵を描いて楽しんでいました。小学生だったその当時は維管束が単子葉と双子葉で異なることは知らず、植物によって茎の断面が違うことが面白く、いろいろな植物の茎の断面を観察していました。祖父や叔父が芸術家という環境で育ち、絵を描くことは好きだったので、好きな植物の観察と絵を描く作業が同時に行えることが気に入り、かなり永い期間楽しんでいました。高校生生の時につくば万博を見に行き、バイオテクノロジーを知り、その技術に興味を持ち、農学部へ進学しました。在学中に三菱化成植物工学研究所でアルバイトをした経験から、学位を取得し、研究者になる覚悟を決めました。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

学生時代は絵を描くのが趣味でしたが、絵を描くにはかなりの時間が必要であるため、今はほとんど描いていません。時間を見つけて美術館やステンドグラスを見に行くのが唯一の楽しみです。自分で実験しているときや学会で面白い研究の話をしているときが人生で一番

幸せです。もう少し直接自分で実験に携わることができれば時間が増えれば、ストレスも減って量も減るのかなと思います。職場の仲間とお酒を飲んで騒ぐことが趣味になりつつあります。夫も同業者なので、面白い研究や実験技術の話に花が咲きます。プライベートと仕事の線引きをしないタイプなので、バランスの取り方はありません。私にとっては、やりたいこと、やらなければならぬことのバランスが生きる上で重要です。

●後輩へのメッセージ

何もかもできる天才に生まれる人はごくまれです。人間の能力は似たり寄ったりだと思います。一番欲しいものを手に入れるためには、何かを捨てる潔さと覚悟が必要だと思います。自分にとって捨てられないものは何であるのか、常日頃から考えることは大切だと思います。また、「継続は力なり」のことわざのように、下手な実験も10年やればさまになってくるものです。学生を指導していて、一番難しいのは、自分が何をやりたいのか決められない、解らない学生です。とにかくアンテナを張り、勧められた事は何でもチャレンジする事、時には教師の助言通りに行動してみる事も大切だと思います。その時理解できなくても、数年後に、こうゆう事だったのかと納得する事がたくさんあるはずですよ。(私も経験済みです。)

●家族等協力者の声

幸いなことに、私と妻は同業者であり研究領域も非常に近いため、仕事面では互いの状況について比較的よく理解し合うことが可能です。「プライベートと仕事の線引きをしない」夫婦ですので、日常的に、研究で新しい発見をしたときは一緒に喜び、仕事の上で理不尽な思いをした場合は一緒に残念がることで、苦楽を共感することが、お互いにとって一番の協力になっていると考えます。私達が後進に対し正面から見せるのは培われた知識や技術だとすると、背中から見てもらうのは、目標に向かって一心不乱に進む姿勢であると思います。実際に、揺るがない後ろ姿をきちんと見せている妻は、人間として尊敬に値します。研究に限らず、何かに没頭し努力している人間は輝いていると思いますので、それを互いに素直に認めあうことが出来る人間関係を構築することが、非常に重要であると考えています。

女性研究者という生き方を 自分らしくデザイン

系川 紅子（静岡県立大学看護学部 講師）

看護大学卒業後、10年間に亘り臨床看護師として働きながら修士号、がん看護専門看護師の取得、博士後期課程への進学を果たした。臨床看護実践の中で創出される課題を「種」とし、教育・研究機関と連携しながら研究を進めていく「トランスレーショナル構想」を構築したいと考えていたところに現在の上司と出会い、現職に至る。長女が2歳のときに修士課程へ進学し、以来長女は有力サポーターである。



●仕事の内容とやりがい

看護実践から洗練された知識を構築し、それを実践の場に返還するためのシステムを造り上げるために、教育・研究機関と医療機関を行き来する毎日を過ごしている。

週のほとんどを看護学部で学生への講義、臨床実習指導へ費やす傍ら、医療機関で臨床のエキスパートと協働・連携しながら介入研究も継続的に実施している。がん看護専門看護師としてのスキルを活かし、臨床実践をブラッシュアップするための実践知の構築に励んでいる。

医療の発展、多様化する患者ニーズを受け、医療現場が抱える問題は複雑化する傾向にある。やりがいの源は、看護学が蓄積してきた知見が現場を悩ます複雑な問題のパズルを解き明かしたときの醍醐味である。

●進路選択のきっかけ

大学卒業後に就職した大病院は、高度先進医療を提供する医療機関であった。高度先進医療を提供されて尊い命が守られる一方で、救命された患者はたくさんの障害を抱えて生活することになり、医師も看護師も患者や家族を支える方略に難渋していた。

救命は最優先課題ではあるが、救命後の生活に予測を立ててあらかじめ準備し、さまざまな資源をコーディネートして高度医療と多様化する患者ニーズの調和を図ることができないかと考えていた。悩みがピークを迎えた頃、折しも母校の特別講演で米国にて高度実践看護師として活躍していた看護師のスピーチを聞く機会を得た。そのとき、自分が学んできた学問はどのように発展し、これからどのような変遷をたどるのか知りたいと思ったことが進路選択のきっかけである。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

私のワーク・ライフ・バランスの工夫は、生活をシンプルにすること、サポートを厚くすることである。

平日はできるだけ教育・研究に時間を割くために、手間のかかる家事はできるだけ週末に済ませ、最小限の時間で事足りるよう調整している。どうにもならないときは、合格点を下げる努力も惜しまない。

転勤族としてこの地に住みついたため、子育てのサポートは一から作り上げてきた。「できるときに、できることをする」をモットーに、持ちつ持たれつ関係を維持している。ときに頭を下げることを惜しまず、働く母の片翼飛行を支えてくれるサポーターに感謝を尽くす日々である。

●後輩へのメッセージ

教育・研究者は、絶えず時代の潮流を意識しながら伝統と革新の折り合いをつけていく使命があると考えている。前例踏襲主義に固執していたら、人生は楽しくない。前例がないことを恐れず、女性研究者として誰にも真似できない生き方をデザインするというスタンスを持つことが重要であると考えている。

子育ても研究も結果がはるか遠くにあり、ひとつ問題を解決したと思ったら次の問題に遭遇する。先行き不透明な航路に戸惑う時間も財産の一つと思える余裕と強靭さを大切にしたいものである。

Birds of a feather together. とにかく仲間をつくること、同じ考えを持つ者は集まることを期待しながら。そして仕事がしたいときほど、休暇を十分に取ることを心がけている。

人間として成長し続けることができる仕事 それが私には研究者でした

影山智津子（静岡県農林技術研究所植物保護科長）

地元の清水東高校出身、岐阜大学農学部に進み植物病理学を専攻、卒業後、農業職として静岡県職員に採用されました。農業改良普及の現場と試験研究を行き来し、5年前から現職に就いています。その間、野菜栽培技術の普及、カンキツの育種・ウイルス病対策、微生物による環境浄化、病害抵抗性誘導剤の開発、野菜や花きのウイルス病対策などに携わり、平成19年に農学博士を取得しました。



●仕事の内容とやりがい

現在は静岡県で問題となっている植物ウイルス病の防除対策を担当しています。農業会社と連携してウイルス病の発生を抑制する抗ウイルス剤の開発が大きな課題ですが、野菜や花きのウイルス病診断、産地で突発的に発生するウイルス病の緊急防除指導、農業会社が開発中の新しい農薬の病害に対する効果試験も分担しています。

研究は新たな課題に挑戦し、問題を解決するべく原因の究明と技術開発に取り組み、常に歩み続けなくてはならないため、とても大変な仕事です。しかし、産地の問題解決や農業の進歩に貢献できるこれ以上無いやりがいのある仕事です。

●進路選択のきっかけ

父の実家が農家であり、昔よく祖母が遊びに来ながら家の庭に野菜の種などを植えていてくれました。そんな姿を見ていたためか、高校生の頃から野菜栽培の魅力にはまっていました。庭で育てた野菜を見ながら、その美しさと手をかければ応えてくれるうれしさと、農業を勉強したいと思い、農学部に進学しました。大学2年と3年の夏休みに家の近くにあった県柑橘試験場にアルバイトに行き、研究が自分の性格にあっていると考え、研究を目指すようになりました。県職員は研究を希望しても思うようにならない時があります。しかし、希望し続けなければいつかかないますので、自分の夢をあきらめないことです。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

25歳で結婚し、県柑橘試験場にいた9年間の間に2人の娘を産みました。当時はまだ育休は普及していなかったため、産前6週間産後8週間の産休のみで職場に復帰しました。休みが短かったため、それ程ブランクを感じることは無かったのですが、試験研究は残業や自宅に仕事を持ち帰ることも多く家族には迷惑をかけています。その後も、つくば市にある国の研究機関に9ヶ月間依頼研究員として子連れで行きまわし、周囲の人に支えられてここまでやってこられたと考えています。子供の成長につれて生活時間も変わるので、隙間を見つけて好きなこと（読書、映画、美術館めぐり、家庭菜園）をやり、仕事に傾いた自分を反対方向に戻しています。スポーツは心の健全化に大切なので、趣味のテニスでは就職してからずっと週末に楽しんでます。

●後輩へのメッセージ

人間として生まれてきたからには、自分にしか出来ないことを探して、小さなことでも社会に貢献することでその意味を見出しています。狭い社会だけに留まらないで広く眺めて見ることも役に立ちます。

結婚して子供を持って、女性が働き続けることが普通になってきています。社会環境や周囲の人の考え方も変わって、より仕事を続けやすくなっています。自分の夢をいつまでも持ち続けてあきらめなければ、いつかかなうことを今までの経験で強く確信しています。

人生のリスタートはいつからでも！

數村 公子 (浜松ホトニクス㈱中央研究所 専任部員)

静岡県立浜松北高等学校卒業→静岡大学農学部農芸化学科卒業→国際工学院専門学校浜松校バイオテクノロジー学科教員(教務課長)→学校閉校に伴い退職後、7ヶ月の専業主婦期間を経て現職へ



●仕事の内容とやりがい

現在浜松ホトニクス㈱の中央研究所で、研究者として頑張っています。蛍光と化学発光という二つの極微弱な光信号を同時に検出する技術を用いて、白血球の自然免疫反応機構を光でモニターすることに成功し、現在はそれを活かした「食」の機能性評価法の開発に取り組んでいます。入社当初は、教育現場から研究所への転職で、人間関係、環境など一変し、かなり戸惑いました。また、最先端の知識・技術を理解するために毎晩自宅で勉強をするなど、苦勞したこともたくさんありました。がむしゃらに突き進んで空回りしていた部分も多かったですが、最近やっと少しずつ成果が見えてきて、今年の春、「好中球の免疫反応を利用した新規食品機能性評価法の開発」で飯島藤十郎食品技術賞をいただくことができました。細胞との付き合いで大変ですが、やりがいを感じながら、毎日充実した日々を送っています。

●進路選択のきっかけ

丁度私が卒業するときに、前職の専門学校が新しく浜松に開校されることになり、専任教員が必要とのことで、浜松出身者である私を推薦していただきました。開校から閉校まで14年間勤務し、授業だけでなくバイオテクノロジー学科1,2年生の担任として進路に関することや生活指導まで、盛りだくさんの仕事をこなしてきました。その時の働きぶりを評価してくれた故郷山静夫先生(元静岡大工学部教授、専門学校顧問)の紹介で、現職に就くことができました。大学在学中は、研究職に就きたいと思っていたので、念願がかなって良かったです。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

ほぼ毎日研究活動に12時間以上を費やしており、仕事中心の生活です。こんな生活が許されるのは、幸か不幸か子供がおらず、主人と2人暮らしだからでしょう。主人は、高校の数学の教師で、体育系の部活の顧問をしているので、休日もほとんど留守ですし平日も帰りは遅いようです。私達は、自然に家事の分担ができていて、お互い助け合って生活しています。一緒に過ごせる時間は少ないですが、どんなに遅くなくても必ず夕飯は二人一緒におしゃべりしながらとります。私にとって、とてもリラックスできる時間になっています。また長期休暇には、年に数回大好きな海外旅行を友人と楽しんでいます(主人は部活があっていけないので)。時間は仕事に大きく傾いていますが、精神的にはうまくバランスが取れているなど感じています。

●先輩へのメッセージ

30代後半の転職は、かなり勇気がいるものでしたが、頑張れば何とかなるものです。私は、大学時代、研究職に就きたい、教職だけは嫌だと思っていたのですが、意に反して専門学校に就職することになりました。でも、人を育てる仕事は想像以上に素晴らしいもので、大変やりがいを感じ、一生の仕事にしようと30代半ばに一念発起して、教員免許取得を目指すことにしました。静大等に科目等履修生として1週間に1日休みを取って通い、2年かけて高校理科の教員免許を取得しました。その後すぐに閉校が決まり、とても残念に感じましたが、その時の頑張りで次の道を開くことができました。思うような道に進めないこともあるかと思いますが、どの道に進むか以上に大切なことは、進んだ道でどう生きるかだと感じています。そして再スタートはどの段階からも可能です。今更……なんて考えないでトライしましょう！

なりたい自分を描いて、 なりたい自分になりましょう！

金子 雪子 (静岡県立大学薬学部 助教)

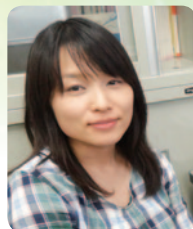
静岡県立大学薬学部卒業

静岡県立大学大学院薬学研究所博士前期(修士)課程修了

静岡県立大学大学院薬学研究所博士後期課程修了

職歴

大分大学医学部助教を経て現職



● 仕事の内容とやりがい

専門は糖尿病学、特に膵ランゲルハンス島β細胞からのインスリン分泌調節機構およびβ細胞生存に関わる機構の解明になります。インスリンは生体内で唯一の血糖降下ホルモンで、インスリン分泌障害は日本人の2型糖尿病発症の大きな原因として知られています。高齢化が進む日本国内では糖尿病あるいは糖尿病が疑われる人の数は2,000万人に及ぶといわれ、社会的に大きな問題となっている糖尿病ですが、それを治療する薬物の種類は十分とはいえません。そこで、糖尿病の新たな治療薬の開発により、人々にいつか喜んでもらえることを夢みて、研究に精進しています。

また、薬学を専門的に学んだ医療人として、学生が立派に社会に旅立てるよう、彼らの成長のお手伝いをしています。

● 進路選択のきっかけ

高校で製薬会社の研究者など薬を作る職業になることを夢として描き始めました。生物の勉強が楽しかったこともあり、静岡県立大学に入学した時には、できれば博士号まで取りたいと考えていましたが、具体的に何になりたいか、までは考えていませんでした。4年生で研究室に配属されると、β細胞という小さくて数も少ないけれど、人体には欠かせない謎多き細胞に魅せられ、さらに、未知に挑む研究がとても面白く、研究で生きていきたいという目標ができました。修士課程を修了する頃、就職活動を行い、研究者を目指し製薬企業もまわりましたが、自分の目指す研究の方向性とは異なっていると感じ、そのまま博士課程に進学し、自分の研究を続けられる研究所もしくは大学での研究を目指すこととしました。

● ワーク・ライフ・バランスの工夫

糖尿病研究を続けたい、いつかは子供を持ちたいという気持ちは以前から強く持っていました。両方を実現しましたが、実家は遠方で育児の助けは望めず、子供もまだ幼いことから、必然的に家庭に時間を割かないといけない状況です。職場の理解、家族の理解の中で、なんとか仕事と家庭の両立をさせています。こういった状況の中で、常に心がけるようにしているのは、周囲への感謝の気持ちを忘れないということです。自分が仕事と家庭を掛け持ちできるのは、家族、職場の上司、学生など周囲の人たちの理解だと、有難く感じる毎日です。

● 後輩へのメッセージ

これから先、幾度となく人生の岐路に立たされるかと思います。特に女性の場合、そういった選択の機会が多いと思います。選択に失敗しないよう、じっくりと考えることも大切ですが、時には自分を信じて飛び込んでみることも大切です。なりたい自分像をはっきりと描いていれば、きっと実現します。そのためにも、なりたい自分とはどんな自分なのか、様々な事へアンテナを張って、今のうちから考えるようにしてみてください。

家族は生きる喜び、そして原動力

谷口ジョイ（静岡英和学院大学人間社会学部 講師）

大学卒業後は韓国の梨花女子大学校やマレーシア国立マラヤ大学で日本語教育に携わりました。30歳を過ぎ、大学院に新幹線通学を始め、修士1年生の時に第二子、修士2年生の時に第三子を出産。休学せず、育児と学業の両立に励み、メルボルン大学への子連れ留学を経て、昨春、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程満期退学。2014年4月より現職。



●仕事の内容とやりがい

ゼミでは、応用言語学に関連した研究を指導しています。その中心は、第二言語（外国語）としての英語教育とありますが、言語習得に関わる個人的、社会的、心理的要因、年少者に対する言語教育、バイリンガリズム等、言語教育が直面する諸問題を広く取り上げています。また、英語教育においては「知識の習得」のみならず「コミュニケーション能力の育成」も主眼に置き、学習者を中心に据えた参加型授業を行っています。

現在行っている研究の中心は、帰国児童が海外生活によって習得した第二言語（英語）をどのように保持するかについての調査です。10月から研究支援員制度を利用させていただき、大幅な進捗が見られます。

あらゆる場面でやりがいを感じる仕事です。

●進路選択のきっかけ

小学校にあがった息子に「お母さんの夢は何か」と聞かれたことがきっかけです。当時の私は専業主婦。「お母さんは、もうお母さんになっちゃったからなあ……。でも、本当は研究者になりたかったんだ……。」気づけば、そのように答えていました。それを聞いた夫が「今からでも遅くない、応援するよ。」と言ってくれたことから、新幹線で大学院に通いつつ、さらに二人の子を生み、三児の母になり、論文を書き……という生活が始まりました。就職の際には、家庭があるので、全国どこへでも行きます、というわけにはいかず、静岡限定で研究職を探していました。こちらの大学にご縁をいただき、本当に幸運でした。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

我が家の家事は徹底した「適材適所」です。私は料理が大の苦手で、とても時間がかかってしまうので、夫（同じく研究者）にすべてお任せしています。また、3人の子どもたちもよく手伝ってくれるので本当に感謝しています。それでも出張等でどちらかが不在になることも多

く、そんな時は遠方から母親が手伝いに来てくれます。また、私は山間地に暮らしており、地域のつながりが強いこともあり、ご近所の方が本当によく助けてくださいます。周囲の支えがなければ、とても勉強や仕事を続けることはできなかったと思います。悩みは夕方からの会議、そして休日出勤です。夫と協力しつつ、どうにか乗り切っていますが、毎回綱渡りのような状態です。

●後輩へのメッセージ

私の拙い文章を読んでくださって、ありがとうございます。これを読んで「やはり育児をしながら仕事をするのは大変そうだな、やめておこう」と思った方がいらしたら、それは非常に残念なことです。私にとって、家族の存在は生きる喜びであり、あらゆる原動力となっています。心労が重なる時であっても、夫や子どもたちの顔を思い浮かべれば、再び力が湧いてきます。前例をつくっていく、という気持ちで共に励みましょう。

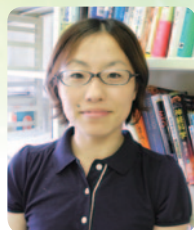
●家族等協力者の声

（夫の声）女性が家事や育児をしながら男性と対等に働くのは、並大抵の努力ではできないと思います。私もできる限り家事を分担していますが、学会等で不在にすることも多く、手が足りないというのが正直なところ。私は朝5時に起きて、朝食を作り、それから家族5人分のお弁当の準備、夕食の仕込みをしてから出かけます。夜は夕食を作らなければいけないので、早めに帰宅します。食材の買い出し、食器洗いも含め、「食」に関すること全般が私の分担です。慌ただしい日々ですが、育児も家事も楽しみながらやっています。

意志のあるところに道はある

松永 理恵 (静岡理科大学総合情報学部 専任講師)

三重県立上野高校卒業→神戸女学院大学人間科学部行動科学専攻卒業→北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻修士課程修了→結婚→同大学大学院博士後期課程単位取得退学→博士(文学)取得→日本学術振興会特別研究員(PD)→北海道大学大学院学術研究員、専門研究員→Freie Universität Berlin, Visiting Scholar (夫婦でドイツ留学)→静岡理科大学総合情報学部専任講師、現職



●仕事の内容とやりがい

“音楽”というと、特別な訓練や教育を受けている人にしか分からないものと世間一般には思われがちです。しかし、実はそうではありません。現在までの研究により、特別な音楽教育経験がない人でも、基本的には音楽家と同じように、音楽を理解していることが明らかになってきました。私の研究は、ヒトがどのように音楽を学び、音楽を理解するのか、その仕組みを認知心理学的観点から解明することです。ポストドク生活が長かったため、好きな研究を常勤職にし、普通の生活が送れること、それ自体が夢のようです。

●進路選択のきっかけ

最初は、臨床心理学を学びたいと考えて大学に進学しました。ですが、大学の講義を受けるなどして、自分は臨床の世界に向いていないことに気づきました。そのため、大学のゼミ配属では、認知心理学のゼミを選びました。ゼミの課題をこなすために訪れた図書館。そこで出会った書籍(「音楽と認知」の「第2章：旋律はいかに処理されるか」)が、私の進路を決めました。大学卒業後は、その本を執筆された阿部純一先生のもとで学びたいという気持ちだけで北海道に飛びました。今考えると、無謀にも、音楽認知研究者以外の選択肢は無いと猪突猛進に思い込んだことが良かったのだと思います。

●ワーク・ライフ・バランスの工夫

夫と2匹の猫と生活しています。研究の仕事は終わりが無いので、平日は午前8時から午後6時までを仕事の時間と決めています。それ以外は、猫と遊んだり、読書したり、ゲームをしたりなど学生時代と同じような生活をしています。週末には、他大学の夫が遠方から(猫に会うために)静岡に来てくれます。その時に、二人でおいしいもの食べながら仕事の愚痴を言い合ったりすることが、翌週の活力となっています。

●後輩へのメッセージ

他人とつながることや他人と共生することは大切ですが、最近は、そればかりが強調されているような気がします。主体的な自由行動が認められる大学生・大学院生時代こそ、群れること無く、個を希求し、時には頑ななまでに他人への依存を潔しとしないという行動に出ても良いのではないかと思います。それが結果的に、自分にしか出来ない研究につながるかもしれません。

●家族等協力者の声

夫である私も大学にて研究活動を行っております。夫婦共に研究者として常勤職に就いているというのは、極めて幸運なことと思います。ですから、二人とも常勤職を持るとわかったとき、共に単身赴任になることも同時にわかりましたが、迷いはありませんでした。実際に単身生活をはじめてみると、仕事を終えたあと、どうでもよい話を直接交わすことがずいぶんストレス発散になっていたのだと感じます。ただ、やはり、夫婦がそれぞれ仕事を持ち、その仕事を自らが大切に思うのはもちろん、相手の仕事の大切さも理解できるというのは、ありがたいことだと思います。

女性研究者ロールモデル集

静岡大学 男女共同参画推進室

平成27年3月発行

E-mail : takenoko@adb.shizuoka.ac.jp

URL : <http://www.sankaku.shizuoka.ac.jp>



国立大学法人

静岡大学

National University Corporation
Shizuoka University



ROLE MODEL

静岡大学 男女共同参画推進室

平成27年3月発行

E-mail : takenoko@adb.shizuoka.ac.jp

URL : <http://www.sankaku.shizuoka.ac.jp>